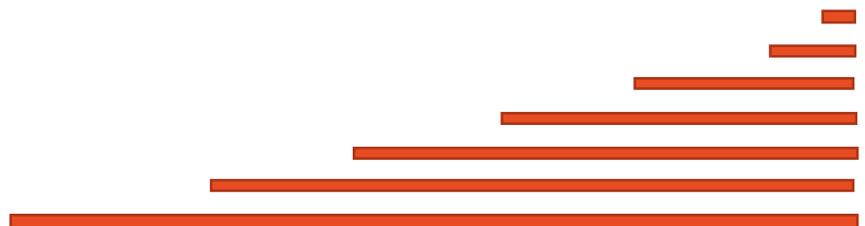


東京カンファレンス 2014 報告書

HCAP 東京大学運営委員会 8 期



2014 年 5 月 5 日



❁ 本報告書について

本報告書は HCAP(Harvard College in Asia Program)東京大学運営委員会 8 期が企画・運営した、「東京カンファレンス 2014」について報告することを目的としたものである。

❁ 目次

本報告書について	1
目次	1
代表挨拶	2
HCAP とは	3
東京カンファレンス 2014 について	3
東京カンファレンス 2014 概要	3
東京カンファレンス 2014 協賛・協力	3
プログラム詳細報告	5～22
1 日目 (3/15) ハーバード生到着・ウェルカムパーティー	5
2 日目 (3/16) 東京ツアー(谷中銀座・秋葉原・お台場)	6
3 日目 (3/17) レクチャー・三菱地所訪問・ホームステイ	7
4 日目 (3/18) 自由時間・沖縄訪問	9
5 日目 (3/19) レクチャー&ディスカッション・現地学生との交流会	9
6 日目 (3/20) ひめゆり平和祈念資料館訪問・エイサー体験・ホームステイ	14
7 日目 (3/21) 茶道体験・東北レクチャー・高校生交流企画・鍋パーティー	16
8 日目 (3/22) レクチャー・キャンパスツアー・自由時間・東大生懇親会	18
9 日目 (3/23) ハーバード生帰国	21
参加ハーバード生の声	22
東京カンファレンス 2014 総括	23
東京カンファレンス 2014 会計報告	24

❁ 代表挨拶

私たち HCAP 東京大学運営委員会 8 期は 2014 年 3 月 15 日～23 日の 9 日間、ハーバード生 12 名を日本に招待し、1 年間の集大成である「東京カンファレンス」を開催致しました。この 1 年間様々な困難がありましたが、このように無事開催することが出来たのはひとえに皆様のご支援・ご指導のおかげだと強く感じております。この場をお借りして、弊団体一同より皆様に心より御礼申し上げます。誠にありがとうございました。以下、今年度 HCAP8 期の 1 年間を振り返りたいと思います。

HCAP8 期メンバー12 人が初めて顔を合わせた 5 月から、我々は 3 月の東京カンファレンス開催という共通の目標に向け 12 名で活動して参りました。

夏にはハーバード大学に向けた企画書の作成に、毎日 2～3 時間のミーティングを費やし、カンファレンスの目的やテーマの解釈、企画内容を議論し、カンファレンスへの想いをぶつけ合う日々が続きました。議論は思うように進みませんでしたが、集中的な議論の機会として設けた合宿の最終日に、「今年の東京カンファレンスでは、沖縄を訪れる」という大胆ともいえる決断の下に 8 期メンバー12 人全員がまとまりました。

12 月以降には東京カンファレンスに向けての準備もいよいよ大詰めとなり、各企画の詰め・関係各所との頻繁なやり取り・施設の予約など 3 月のカンファレンス開催に向けて活動は本格化していきました。

そして迎えた東京カンファレンスでは、東大生とハーバード生が真剣な時間も他愛のない時間も過ごすことで、共に驚き、笑い、学び合いました。中 3 日で訪れた沖縄での、当事者意識をもって基地問題や沖縄戦の歴史と向き合いながら得た出会いや議論は、互いの価値観を揺るがすような経験でした。

ハーバード生や東大生といった志高い仲間との出会い、ゼロからの議論や衝突、社会との関わりから生まれる責任感。何度も立ち止まり、迷い、考えた 1 年間でした。そして、価値観の相違を乗り越え理解し合う難しさ、意見を止揚して一つの作品を作る意義、目の前の機会から貪欲に学びを得る姿勢など、たくさんのことを学びながら、自らの弱さに気づかされる毎日でした。HCAP 現役期としての時間は残りわずかですが、今後も、HCAP という場所を起点に、メンバー各人が加速度的に成長していけることを楽しみにしております。

東京カンファレンス開催にあたっては、多額のご寄付や企画でのご登壇、施設の確保などの様々なご支援、そして企画そのものへの学問的な視点からのご指摘や、企画の質の向上のためのご提案などの様々なご指導をいただきました。このように実のある 1 年間を手にする事が出来たのも、皆様のそういった親身なご支援、ご指導の賜物であると感じています。

来年以降も HCAP という場所が大学一年生にとって最高峰の成長の場所であり続けることを願うと共に、この 1 年の成長を糧に今後の大学生活とその先の将来を有意義なものにしていく所存です。

これからも、HCAP 東京大学運営委員会をどうぞ宜しくお願い致します。

HCAP 東京大学運営委員会 8 期 代表 御代田太一

❁ HCAP とは

HCAP(Harvard College in Asia Program)とは、ハーバード大学に本部を、アジア 8 か国のトップ大学に支部を置く学生主体の団体である。各支部は選考を経て、毎年、ハーバード大学生との交流プログラムを開催している。ハーバード大学とアジアのトップレベル大学との間で、Academic(学問的)・Cultural(文化的)・Social(社会的)な視点から学生会議や交流活動を行うことで、相互の理解を促進し将来に続くような人間関係を築くことを目標としている。

❁ 東京カンファレンス 2014 について

「東京カンファレンス 2014」は、HCAP 東京大学運営委員会 8 期が「Lead our human network, Look for blind spots, Create change」という理念の下で 1 年間活動する中で作り上げた、1 週間の短期交換留学プログラムである。そして今年の 3 月にハーバード生を日本に招待し、「互いにきづきを得ながら、本気で語り合える同志になる」ということを目標に 9 日間の東京カンファレンスを開催した。

また HCAP では、ハーバード本部より毎年学術的なテーマが 1 つ与えられ、各カンファレンスがそのテーマに沿った形で開催される。今年のテーマは「Building Sustainable Cities」であり、8 期は「世界の普遍的な問題」と「日本の強み・独自性」という 2 つの視点でこのテーマを捉え、東京カンファレンスをデザインした。

そして 9 日間のカンファレンスでは Academic(学術的)・Cultural(文化的)・Social(社会的)の 3 つの要素をバランス良く組み込み、テーマに沿った議論や文化体験、他大学生との交流など様々な企画を用意することで、多様なきづきを得ながら真の人間関係を築くことを目指した。

❁ 東京カンファレンス 2014 概要

主催	HCAP 東京大学運営委員会 8 期
日程	2014 年 3 月 15 日(土)～3 月 23 日(日)
参加者	東京大学生 12 名、ハーバード大学生 12 名
テーマ	Building Sustainable Cities

❁ 東京カンファレンス 2014 協賛・協力

協賛	株式会社ベネッセコーポレーション RouteH 駒場友の会 HCAP Tokyo alumni
物品協賛	オリオンビール株式会社

後援	日本国外務省 在日米国大使館
担当教員	東京大学大学院総合文化研究科 広域科学専攻相関基礎科学系 松田恭幸 准教授
企画協力	<p>・「<u>商店街・町内会によるまちづくり(講義)</u>」企画 東京大学総合文化研究科 相関社会科学 山本泰 教授</p> <p>・「<u>三菱地所を見に行こう。in HCAP</u>」企画 三菱地所株式会社 街ブランド企画部の皆さま</p> <p>・「<u>周辺地域に与える影響から在沖米軍基地を再考する</u>」企画 沖縄国際大学 石川朋子 先生 株式会社沖縄コングレ 仲村岳子 様 沖縄国際大学法学部地域行政学科 佐藤学 教授</p> <p>・「<u>米軍基地の跡地利用から持続可能なまちづくりを学ぶ</u>」企画 琉球大学工学部環境建設工学科 小野尋子 准教授 研究室の皆さま</p> <p>・「<u>エイサー文化体験</u>」企画 沖縄大学エイサー部「新風(みいかじ)」の皆さま</p> <p>・「<u>茶道体験</u>」企画 東京大学裏千家茶道同好会の皆さま</p> <p>・「<u>東大生×ハーバード生×高校生交流</u>」企画 株式会社ベネッセコーポレーション 高校事業部 尾澤章浩 様 東京大学大学院総合文化研究科 広域科学専攻相関基礎科学系 松田恭幸 准教授 東京大学グローバルコミュニケーション研究センター 駒場ライターズスタジオマネジャー 片山晶子 特任講師 社団法人 日本イスラエイド・サポート・プログラム 理事 丹原健翔 様</p> <p>・「<u>レクチャー ～持続可能なまちづくりを考える～</u>」企画 東京大学大学院工学系研究科 社会基盤工学専攻 堀井秀之 教授 東京大学 知の構造化センター 木全弥栄 様</p>
その他ご協力	<p>公益財団法人 笹川平和財団 株式会社ヒトメディア 株式会社プレジデント社 沖縄県庁 沖縄県平和協力センター OPAC 学生団体ダイガク.TV 東京大学教養学部等学生支援課 学生支援係 鈴木智香子 様 東京大学駒場コミュニケーション・プラザ</p>

❁ 各プログラム詳細報告

東京カンファレンス 2014 のプログラム詳細について、時系列に沿って以下に報告する。

1 日目(初日):ハーバード生到着・ウェルカムパーティー

<ウェルカムパーティー>

日時:3/15 16:00~

場所:東京大学駒場キャンパス「和館」

■ 企画内容

- ・日本に到着したハーバード生を歓迎する会として、手巻き寿司パーティーを開催した。
- ・カンファレンス全体の予定をハーバード生向けにプレゼンテーションした。

■ 企画目標

- ・ハーバード生を東京に迎え入れ、カンファレンスを円滑に開始する。
- ・東京カンファレンスの行程を丁寧に説明し、それらの持つ意義や全体の中での位置づけを伝えることで、ハーバード生から今年度カンファレンスの趣旨への理解を得る。

■ 企画詳細と総括

成田空港にて予定通りハーバード生 12 名を迎えた。来日したハーバード生の一人一人にとって 9 日間が人生を変えるような経験となるように、カンファレンスを成功させようという意気込みと共に開始した。

交通機関の利用方法や、宿泊先である駒場キャンパス内「和館」の宿泊に際して注意を説明した後、手巻き寿司を全員で楽しんだ。ハーバードカンファレンスに参加したメンバーにとっては 2 か月ぶりの再会であり、1 月のハーバードカンファレンスに参加しなかったメンバーにとっては待ち望んだ対面の時間であった。ハーバード生、東大生ともに、カンファレンスの初日として仲を深める場を存分に活かしていたように思う。夜遅くまで話し声は絶えなかった。



食事の後、東京カンファレンス全体のプラン、および各企画の意義を全体の文脈に置いて紹介するためのプレゼンテーションを行った。

カンファレンス運営においては、個々のメンバーが自分の担当の企画に集中しがちである。だからこそ、このようにカンファレンスの全体感を互いに共有することが、参加者各人がそれぞれの企画を関連づける姿勢につながり、真に有意義なカンファレンスを実現するために効果的かつ不可欠であることを実感した。

2 日目：東京ツアー(谷中銀座・秋葉原・お台場)

<東京ツアー>

日時：3/16 終日

場所：谷中銀座・秋葉原・お台場

■企画内容

- ・グループに分かれ一日かけて谷中銀座商店街、秋葉原、お台場、渋谷をまわった。
- ・特に谷中銀座においては、17日の山本泰教授によるレクチャーの事前フィールドワークを兼ねた。

■企画目標

- ・カンファレンス序盤でのグループ活動を通じて、両大学生の親睦を深める。
- ・テーマである「持続可能なまちづくり」に従って、東京都内でも特徴的な三都市を訪問することで、日本・東京の都市とは如何なるものかを体感してもらう。今回は、

日本特有の商店街「コミュニティ」が今なお続く「谷中銀座」、”電気”と”サブカル”という世界に誇れる「文化」を中心として発展してきた「秋葉原」、ウォーターフロントとして日本が誇る「技術」を駆使して近未来的に開発された「お台場」の三都市で散策を行った。

■企画詳細と総括

グループ毎に散策を行った。現地の下見や事前調査で得た知識を活かして、「持続可能なまちづくり」の文脈で各都市の特徴をガイドし、全体として、楽しみながら日本の都市を体感する、という目的が達成されたように思われる。

①谷中銀座

谷中銀座商店街ではメンチカツや 10 円饅頭といった名物が珍しかったようで、ハーバード生に大変好評だった。また、客に対してのみならず店同士の相互交流も活発で、街全体のつながりや発展を大切にしている「コミュニティ」的商店街に、非常に興味を持ったようであった。日本の”Shopping District”を感覚的につかむ機会となり、17日の商店街コミュニティに関するレクチャーの良い導入になった。

②秋葉原

昼からは秋葉原の散策を行った。アニメ、メイドなどのサブカルチャー、極小部品から最先端電子機器まである電気街、そして江戸総鎮守としても有名な、神田明神。一つの都市に様々な側面の日本らしさを内包し、それらが共存する秋葉原に「本当にここは興味深い都市だ」とハーバード生も満足げだった。また、ハーバード生からの「秋葉原では英語のみならず、多様な言語に対応できる体制が至る所で見られて、外国人はさぞ居心地がいいだろう」という発言に、私たち自身が秋葉原の国際都市としての顔にはっと気づかされるという一幕もあった。

③お台場

お台場では、かつて海だった場所が、美しい街並み、風景を持つ臨海都市として生まれ変わった事実特に驚いていた。夕日が沈む素晴らしい雰囲気の中で存分に散策を楽しむことが出来、お台場が一番のお気に入りと言うハーバード生も多かった。

楽しみながら親睦を深めつつ、「過去」「現在」「未来」、「人」「文化」「技術」といった様々な切り口で、日本らしさを持つ三都市をめぐる、ハーバード生には、日本の都市について、体験を伴った多角的な理解を促せたと感じた。特に、彼らから「持続可能な都市に重要なのは”人”か”技術”か」という話題が出たときには、私たちの狙いが達成された実感を得た。しかし、より多くの要素を彼らに見せようとしたがために、その一つ一つを「じっくりと見て、感じたことを深く掘り下げる」時間が、個人間に留まってしまったことが反省である。一方、東大生は、普段慣れ親しむ3都市を、比較の文脈の中で一気に見ていくことで、それぞれの都市が、なぜ良いのか、他の都市と比べて何が優れているのかについてまでじっくりと考えるきっかけとなった。



3 日目: レクチャー・三菱地所訪問・ホームステイ

< 商店街・町内会によるまちづくり(講義)企画 >

日時: 3/17 10:00~12:00

場所: 駒場アクティブラーニングスタジオ (KALS)

■ 企画内容

東京大学総合文化研究科(関連社会科学)の山本泰教授より、商店街や町内会などの自治コミュニティについて社会学的な視点から考えるための講義を頂戴した。

■ 企画目標

- ・「持続可能なまちづくり」における、コミュニティ形成などのソフトウェア面へのアプローチを学ぶ。
- ・前日に訪れた谷中銀座商店街を、社会学的な視点から捉えなおす。
- ・当日午後に訪れる予定であった丸の内について事前知識を得る。

■ 企画詳細と総括

授業は大きく三部構成を予定していた。

第1部 山本教授によるレクチャー

「持続可能なまちづくりにおけるソフトウェア的視点」

第2部 レクチャーを踏まえての議論

第3部 KALS のデモビデオ放映

第1部では、山本教授に、持続可能なコミュニティ形成についてお話しいただいた。事例として、谷中銀座や丸の内を取り上げていただいた。

第2部では、「ハーバード周辺にコミュニティを新たに導入するとしたらどのような試みが考えられるか」などのトピックを事前に用意していたが、レクチャーの質疑応答から始まり、話題が順に広がっていったため、流れに任せてフレキシブルな議論を実施した。その結果、「なぜ地域社会は崩壊したのか」などの話題にはじまり、活発な議論が飛び交うことになった。

第2部のディスカッションの議論が尽きなかったため、KALS の紹介デモビデオの放映の時間をディスカッションに充て、ハーバード生に十分な議論時間を用意するという臨機応変な対応をしていただいた。

本企画は、東京大学駒場キャンパスのアクティブラーニングセンター(KALS)にて実施した。

KALS は、学生と教員の双方向的な学びを促進するようデザインされた教室であって、普段から議論を中心に授業が展開されるハーバード生を交えてのレクチャーを実施する場としては最適であった。

全体を通して、ハーバード生と、アメリカにはあまり存在しない「商店街コミュニティ」などの知識インプットと議論をすることができ、有意義であった。またカンファレンス全体の文脈に置いても、持続可能なまちづくりにおけるソフトウェア的側面を強化するという点で、知的に魅力ある企画になった。



<三菱地所を見に行こう。in HCAP>

日時: 3/17 14:00~16:00

場所: 三菱地所丸の内永楽ビルオフィス・丸の内周辺

■企画内容

三菱地所株式会社街ブランド企画部の方々にご協力いただき、日本有数のCBD 丸の内の成長を支える、丸の内プロジェクトで目指されるまちづくりについて、レクチャーやショールーム・実地見学を通じてご案内いただきました。

■企画目標

- ・「持続可能なまちづくり」を考える上で、都市計画は不可欠である。長期的な視点で個々の建築物・技術・人を相互に関連させる役割の重要性を知る。
- ・日本有数の独自性を持つ丸の内プロジェクトに注目し、その特徴を他地域と比較しながら考察する。
- ・今後まちづくりを学び、まちと関わる上で、まちを支える各機能を都市計画の中に位置づける視点を得る。



■企画詳細と総括

企画冒頭、三菱地所オフィス内にて、丸の内プロジェクトの概要についてレクチャーをしていただいた。ムービーや模型を用いたご説明は大変わかりやすく、また都市計画の規模、官民協働、長期性、そしてインタラクティブなまちづくりなどの丸の内固有性に、東大生とハーバード生双方は大いに関心を持ったようだった。次に訪れた EGGJAPAN では、ベンチャー企業同士の出会いを促進する施設やサービスについて学んだ。実際に私たちの目の前でたくさんビジネス交渉が行われており、まち全体の発展を支える新たなビジネスの出発点、その存在を実感した。続く ECOZZERIA では環境面の取り組みを

ご紹介いただいた。知的照明システムなどの最新技術に加え、ビジネスマン同士の交流を創出する環境イベントも都市を活性化させる一助となっていることを学んだ。丸の内オフィス街を歩く場面では、文化を表すモニュメントや 31m のスカイラインなど、都市計画の実践を体感できた。一方で数多くある丸の内の工夫に気づき切れていない学生が多く、事前に両学生の知識をより充実させることで、更なる学びが得られただろうことが反省点である。最後に、三菱一号館前広場にて、ベンチに座りながらのリフレクションを行った。丸の内ゴミ一つ無いきれいな街並み、そして古いものと新しいものが混在した街並みに驚くハーバード生が多く、都市計画の実践と、それが人の意識にも根付いていることを理解した様子だった。またこの都市計画は三菱地所が面的開発を進められるこの地域だからこそ実現するもので、他地域には応用しづらい点を指摘したハーバード生もいた。この企画を通して、ソフト・ハード両面でまちをデザインする、そんな都市計画の存在を強く実感し、都市が持つ目に見えない魅力を理解する素養が身についた。話題は丸の内から世界中の都市に広がり、尽きることなく盛り上がった。

<ホームステイ>

日時: 3/17~3/18, 3/20~3/21

場所: 参加東大生の自宅

■企画内容

東大生メンバーの家に、ハーバード生がホームステイする

■企画目標

日本の一般家庭の家族・家の生活リズムや雰囲気を感じ取る

■企画詳細と総括

2日目の企画を終え各東大生の家に向かった。東大生の家族に初めて面会した際は、ハーバード生も緊張している面持ちであった。しかし夕食を食べながら東大生の家族と話すにつれ、緊張がほぐれ、東京カンファレンスの中での束の間の休息を楽しんでいた。また、ハーバード生は日本人家庭の「おもてなし」精神に触れ、感激していた。日本の一般家庭の雰囲気を感じてもらうことを目的に設けられたホームステイであったが、日本人にとってはごく当たり前であるような文化・慣習に対してもハーバード生たちは好奇心を示し、東大生に新たな視点をもたらしてくれるなど、図らずも東大生にとっても「きづき」の場になった。



4 日目：自由時間・沖縄訪問

東京カンファレンス 4 日目である 18 日は、午前中に自由時間を設けホームステイを終えた東大生とハーバード生がグループで東京の好きなところを回った。この日は多くの参加者が築地に朝早く向かい、築地市場を見学した後、寿司や海鮮丼を楽しんだ。その後、成田空港に集合して東京を後にし、沖縄へと向かった。ハーバード生にとっては初めての地である沖縄では、到着後、早速沖縄料理屋にて沖縄の伝統楽器である三線の弾き語りライブを聞きながら沖縄料理を楽しんだ。東大生が、あまり親しみの無い沖縄料理を多少手こずりながらもなんとか説明している場面など、和やかな光景も見られ、次の日から始まる沖縄でのプログラムの前に、沖縄の独自の食文化を体感し、沖縄に対して親近感を持つ良いきっかけとなった。



5 日目：レクチャー & ディスカッション・現地学生との交流会

＜周辺地域に与える影響から在沖米軍基地を再考する＞

日時：3/19 10:00~11:00

場所：沖縄国際大学レクチャーホール・屋上

■企画内容

・「米軍基地の生活への影響・問題」に関するレクチャーでは、沖縄国際大学の石川朋子先生に、周辺住民の生活に対する在沖米軍基地の影響をスライドや動画を用いてお話していただき、基地の実情を学んだ。

・その後沖縄国際大学の屋上から普天間飛行場を実際に展望し、米軍基地と周辺地域の現状を自らの目で確認した。



■企画目標

- ・東大生とハーバード生が沖縄に米軍基地がある実状と意味を知り、当事者意識を持って基地問題を考える。
- ・本カンファレンステーマ「持続可能なまちづくり」の視点に即して基地問題を再考する。
- ・米軍基地の周辺住民の視点から、基地問題の本質である「基地があること」について思考を深める。

■企画詳細と総括

本企画は、米軍基地の生活への影響・問題に関するレクチャーと、実際に普天間飛行場を展望するという二部構成であった。

① 米軍基地の生活への影響・問題に関するレクチャー

ご登壇いただいた沖縄国際大学の石川朋子先生には騒音問題の経緯や基地外住居の増加によって海岸付近の本来の景観が損なわれつつあることを主にお話いただいた。米軍ヘリの沖縄国際大学への墜落事故を知ってはいたが、墜落場所が講義室のすぐ隣だということを知り、また事故当日の生々しい実体験を語っていただいたことで、自然と基地問題について当事者意識が醸成された。通訳の方のご協力もあり、ハーバード生も含め全員が熱心に先生方のお話を耳を傾けていた。またカンファレンステーマである「持続可能なまちづくり」にも注目し、基地問題を考える上で「誰にとって」持続可能なかを考える必要があると説明していただいた。その言葉は盲目的に持続可能性を善としていた私たちの心に響き、新たな視点を与えてくれた。

② 普天間基地展望

講義で学んだ普天間飛行場を間近にして、私たちはその大きさと住宅街との密接度合いに驚いた。「もし基地周辺に住んでいたら」という当事者意識を皆が徐々に持ち始めていたように思われた。ハーバード生の中には熱心に石川先生に質問をする者もあり、企画終了後のバス内では自然に基地問題についての議論が始まっていた。この日は基地問題を一日かけて考える日であったが、本企画の強いインパクトは、問題へのめりこむ布石となった。



<米軍基地の跡地利用から持続可能なまちづくりを学ぶ>

日時: 3/19 11:30~13:00

場所: 宜野湾市 Gwave 宜野湾ベイサイド情報センター

■企画内容

都市工学の専門的な観点から在沖米軍基地跡地利用計画の提案をなさっている、小野尋子先生をはじめとする琉球大学の環境建設工学の研究室の皆様にご講演をお願いした。ここでは、沖縄県が主催して昨年 2013 年に行われた「沖縄の新たな発展につなげる大規模基地返還跡地利用計画提案コンペ」の受賞作品のプレゼンテーションをお願いした。

■企画目標

本カンファレンス全体のテーマである「持続可能なまちづくり」に対し、沖縄に特有の課題とその解決策を学び、本カンファレンスでの学びを幅広く具体性を伴うものとする。

■企画詳細と総括

この企画を立案した背景には、普天間飛行場都市を取り囲むように形成された宜野湾市の様子を、弊団体メンバーが実際に見学して、「この基地を撤去しその広大な跡地を有効活用することでどれほど都市の魅力を向上させることができるだろう」と関心を持ったことがある。



カンファレンステーマである “Building Sustainable Cities” と今年のカンファレンスにおいて重視した「在沖米軍基地問題」が交差するという意味でも重要な位置づけを持つ企画となった。

本企画でのプレゼンテーションは、科学的検証に基づく成長戦略と、土地の用途別需要の検証、土地所有者の意向調査などに加えて、さらに沖縄の歴史・文化的背景を踏まえて組み立てられた具体的な都市開発計画の提案である。プレゼンでは米軍基地跡地にどのように観光、交通、医療、教育、居住などの拠点を配置していくか、という専門的なプロセスを拝見したことで、「持続可能なまちづくり」について、具体性を伴った見識を深めることができた。例えば、「中南部の交通拠点となり人口が増加することが予想される普天間飛行場跡地に、労働集約型の福祉産業を育成する。」「地理的に中国に近く琉球王国には交易の拠点として栄えた歴史を持つ那覇軍港跡地を、中国人観光客向けレジャー施設として利用する。」などのプランが紹介された。多くの学生にとって学術的な分析を伴う都市計画に触れる初めての機会だったこともあり、また基地跡地という土地に特徴的な事情も関係することから、プレゼンテーション後の質疑応答では「跡地を所有する地主はどれくらいなのか」など活発に質問が寄せられた。

総じて、まちづくりについてアイデアを得る点において、十分な成果があったと考える。一方で、意見交換のための十分な時間を確保できなかったことにより、参加学生にとっては知識のインプットに留まってしまったこと、また沖縄での他の企画で学んだことも踏まえて、基地の問題により踏み込んだ考察(戦後強制的に土地を接収された地主が返還後の都市計画にどう関わっていくか、など)を行えなかったことは反省点である。



＜基地ツアー＞

日時: 3/19 12:45~14:30

場所: 北谷町砂辺・沖縄市コザ周辺

■企画内容

沖縄の在日米軍基地から強く影響を受けている街を見学する。沖縄中西部の北谷町砂辺をバスから車窓見学し、沖縄中部の沖縄市にてフィールドワークを行った。

■企画目標

在日米軍基地が周辺の街に与える影響を体感する

■企画詳細と総括

2つの場所の見学を通して、日米の間で問題となっている基地問題について当事者意識を持って考え、これからも考え続けるきっかけになった。

①砂辺バスツアー

北谷町砂辺地区は沖縄県中部の米空軍の嘉手納基地の南西に位置し、嘉手納基地に発着する戦闘機の騒音被害が深刻な地域である。また砂辺には米軍の基地外住居が多数存在している。沖縄国際大学の石川朋子先生の講義で学んだ基地の影響を自分たちの目で確認した。米軍人・軍属の家族と思われる外国人が実際にいるのを見て、ハーバード生も驚いた様子だった。どういったアメリカ軍人が基地の外に住めるのか、どれが基地外住居なのかなどを熱心に聞いてきたハーバード生もいた。アメリカ風の住宅が立ち並ぶ住宅街からほんの近くには、沖縄の人の家を確認することもできた。明らかに基地外住居とは雰囲気が異なり、同じ地域に双方が存在していることについて関心を持った。最後に嘉手納基地のそばをバスで通った。嘉手納基地を知っているハーバード生も多く、その広さに興味を持ったようだった。反省点は、車窓見学故に活動が受動的になってしまったことである。ハーバード生が興味を持って能動的に動けるような工夫をもう少し凝らすべきだった。



全体として、今回の砂辺のバスツアーを通じて、ハーバード生も東大生もアメリカ軍基地が砂辺地区に与えてきた影響について体感し、そこに暮らす住民の視点で米軍基地問題について考えることができた。

②コザツアー

沖縄市コザは沖縄県中部の米空軍の嘉手納基地の東に位置する。沖縄の中でも歴史的に基地から受けた影響が強いコザを歩き、基地が街に与えてきた影響を考えた。本企画から沖縄の学生 8 名にも参加いただいた。嘉手納基地への出入りのためのゲートから伸びるゲート通りを歩き終えたあと、沖縄の学生の提案でグループに分かれ、自由な雰囲気の中でコザのゲート通りを歩いた。店に入ったグループもあれば、基地問題について歩きながら話したグループもあった。沖縄の学生の提起した基地に対する問題意識に対して、東大生、ハーバード生が熱心に考え、答える姿が印象に残っている。深い考察は加えられなかったが、米軍基地の街への影響を強く受けてきたことは看板や店の雰囲気などから少しなりとも体感することができた。基地問題を考える上で、周辺の街への影響についての考察は必要となってくる。今回の見学はその影響について考える際に数値だけでなく、様々な観点から考えていききっかけになるだろう。

<基地ディスカッション>

日時: 3/19 14:30~16:00

場所: 沖縄市立中央公民館

■企画内容

沖縄の学生から基地問題についての意見を聞き、共にディスカッションを行った。

■企画目標

現地の人の生の声を聴きハーバード生、東大生が当事者意識を持って、基地問題を考える。

■企画詳細と総括

基地お話し会では、沖縄の学生主導で、4つのグループに分かれて基地問題について話した。沖縄の学生は8名が参加した。

沖縄の学生からは基地問題について様々な話を聞くことができた。学生ごとに話す内容は異なっていたが、どの話も沖縄の学生の率直な意見や生の経験から生まれたものであった。その多様な意見から基地問題の複雑さを垣間見ることができた。それに加えドイツから沖縄に留学している学生からは、歴史的観点から米軍基地が存在するドイツと沖縄との違いについての話を聞くことができた。ドイツの場合は第二次世界大戦後、西ドイツ全体に米軍基地が置かれたのに対して、沖縄の場合、アメリカの排他的統治下に置かれて、日本本土の基地が移転する形で沖縄に米軍基地が集中した、という歴史に注目した説明だった。ドイツと沖縄の違いを的確に捉えており、大変興味深かった。



ハーバード生にいかに関与者意識を持って議論させるかが事前からの課題であったが、興味を持てたようだった。基地問題は日本国内でも広く話題に上がっており、日米関係にとっても避けられない問題である。今回、両国の将来を担うハーバード生、東大生、沖縄の学生が基地問題について考えを共有できたのは大変貴重な機会になった。ともすれば日米関係という大きな視点から捉えることに終始しがちな基地問題を個人レベルの視点から捉えることができたと感じた。

<沖縄の学生×東大生×ハーバード大生 観光・交流会企画>

日時: 3/19 16:45~21:00

場所: 首里城・那覇市国際通り

■企画内容

沖縄の学生とともに首里城を回り、その後国際通りにて懇親会を行った。

■企画目標

- ・首里城の観光: 本土とは異なる沖縄の文化、歴史を体感する。
- ・懇親会: 沖縄の学生、ハーバード生、東大生の間で打ち解けた雰囲気
将来に続く人間関係を築く。



■企画詳細と総括

この企画を通して、さまざまな沖縄の文化・歴史を知り、体感した。

東大生は同じ日本でありながら、本土とは異なる沖縄の文化・歴史に触れ、文化の多様性について考えることができた。

①首里城の観光

東大生、ハーバード生、沖縄の学生がグループに分かれて、首里城の観光を行った。沖縄の学生は基地ディスカッションに参加した8名の内の7名に加えて新たに5名が参加した。



展示品を見ながら、適宜ハーバード生に沖縄の歴史、文化を説明している沖縄の学生もいた。

ハーバード生も東大生も琉球の歴史、文化が同じ日本にありながら日本本土の文化と違うということや、沖縄戦の悲惨さについても学んだ。首里城が沖縄戦で完全に破壊されたという事実、ハーバード生は衝撃を受けたようだった。さらに、首里城の中を見学したあと、かつての日本軍の司令部につながる壕の入口を訪れた。東大生もハーバード生も実際に首里城が沖縄戦の戦場だったのだということを実感したようだった。時間の都合上、急ぎ足の見学になってしまい、その分沖縄の学生との会話が少なくなってしまったことは反省点である。

②懇親会

国際通りで、首里城の観光に参加した沖縄の学生とハーバード生、東大生との間で懇親会を行った。新たに2人の沖縄の学生が参加した。ジュシー（沖縄風炊きごみご飯）などの沖縄の料理を食べながら、ハーバード生、沖縄の学生、東大生が大学生活、企画の感想等について自由に話した。東大生、ハーバード生は個性豊かな沖縄の学生と話し、沖縄の学生はハーバード生や東大生の大学生活や考え方から刺激を受けたようだった。



6 日目 : ひめゆり平和祈念資料館訪問・エイサー体験・ホームステイ

＜ひめゆり平和祈念資料館訪問・沖縄県平和祈念公園散策＞

日時: 3/20 10:00~13:00

場所: ひめゆり平和祈念資料館・沖縄県平和祈念公園

■ 企画内容

ひめゆり平和祈念資料館を訪れ、沖縄についての理解を深めた。その後沖縄県平和祈念公園を散策しながら平和祈念資料館で見たものや、平和・戦争についての意見を交わし合った。

■ 企画目標

- ・沖縄と米国の負の遺産である沖縄戦について、その歴史や背景への見識を深める。
- ・沖縄戦の実情を感じ取ることで平和・戦争や日米関係に思いを馳せ、普段は表に出さないような根源的な価値観を共有する。

■ 企画詳細と総括

概ね目標は達成できたといえる。資料館では、東大生・ハーバード生が熱心に議論しながら資料を読み進めた。沖縄戦の歴史に深く興味を持ち東大生に詳細な質問を投げかけるハーバード生もいれば、戦時中の悲惨さを語った女生徒による手記の前で「戦争を止める方法」について議論を始める参加者達の姿も見られ、資料館で目の当たりにした沖縄戦の実情が東大生・ハーバード生両者にとって衝撃的なものであったことが窺えた。また、「あれほど感情的で、自国に批判的な資料館は自分の国にはない」というインド出身のハーバード生もおり、全体としてハーバード生との会話は東大生にとって「日本」や「日本の価値観」を相対化するきっかけにもなったと言える。

その後に訪れた沖縄県平和祈念公園を散策しながら資料館の感想を共有した後、24名全員で「平和の灯」を囲みながら、沖縄でのプログラムの感想やこの3日間に持った想いを口々に語った。東大生にとって、「東京カンファレンスの一部を沖縄で過ごす」という決断をした夏以来、1人1人の思いを沖縄の3日間に込め企画を練ってきたが、沖縄のプログラムの感想を語るハーバード生の真剣な顔に、「沖縄にハーバード生を連れて来てよかった」という気持ちを多くの東大メンバーが素直に抱くことができた。



＜エイサー文化体験＞

日時：3/20 14:30~16:00

場所：沖縄大学

■企画内容

沖縄の伝統文化であるエイサーの演舞を観賞し、エイサーの歴史についてのレクチャーを受けた後に、沖縄の民族衣装を着てエイサーの体験(大太鼓・太鼓・手踊り)を行った。本企画実施には沖縄大学のエイサー部「新風(みいかじ)」の方々に全面的な協力を仰いだ。

■企画目標

- ・沖縄の締めくくりの企画として、楽しい時間を過ごしながら、エイサーという沖縄の伝統文化(その土地の人の精神に染み込んでいる文化)を通じて、「沖縄」というものを感じる
- ・沖縄の大学生と、「文化」という手段を用いて、交流を深める

■企画詳細と総括

この企画は沖縄大学のエイサー部「新風(みいかじ)」の方々に全面的な協力を仰いだものであったが、面会当初はやはり、ハーバード生も沖縄大学生も少し緊張した面持ちであった。しかし企画の最初の部員の方々によるエイサーの演舞の力強い太鼓の響きや沖縄の独特な三線の響きに魅せられるにつれ、ハーバード生もエイサーの世界に引き込まれていくのがよく分かった。その後はエイサーについての説明を受けた。これによりエイサーについての基本的な知識を理解し、沖縄の文化という、いわゆる「日本の文化」とは異質の文化についてハーバード生は更に興味を引き立てられたようであった。説明の後はエイサー体験を実施した。ここでは最初の緊張も解けたようで、エイサーの技を会得しようと積極的に沖縄大学生と交流を図っているハーバード生の姿がとても印象的であった。

体験の最後には、大太鼓・小太鼓・手踊りと分かれて練習していた全パートが終結して、エイサー部の皆さんに教えていただいたことを一つ一つ思い出しつつ一つの曲をみんなで演じた。わずか一時間程度の体験であったが、皆楽しそうに演舞を行っており、沖縄での最後の企画として、「楽しい時間を過ごしてもら」「沖縄を感じてもら」という目的を達成できたようだった。また、最後の全体写真撮影の際には、皆和気あいあいとしており、親睦を深められた様子が垣間見えた。



7 日目：茶道体験・東北レクチャー・高校生交流企画

<茶道体験>

日時：3/21 12:30~14:00

場所：東京大学駒場キャンパス「柏蔭舎」

■企画内容

東京大学裏千家茶道同好会の協力のもと、ハーバード生にお手前を披露していただくとともに、茶道の作法を指導していただき、点茶を体験する。

■企画目標

侘び寂び等、日本独自の伝統文化や美意識を、茶道体験を通してハーバード生に学んでもらう。

■企画詳細と総括

東京大学の柏蔭舎にて裏千家茶道同好会のご協力のもとに実現した。お手前と茶道具の説明が同時進行で行われたため、ハーバード生はお手前と茶道具を見比べながらお手前の所作を深く学ぶことができた。静けさの中、桜の花びらを象った薄紅色の和菓子をぎこちなくいただいた後、三口でお茶を飲みきることや茶碗を回すこと等の作法を真似ながら抹茶をいただいた。ハーバード生の点茶体験では、実演の裏千家の方々を中心に円を作り、それまでの緊張感がほぐれたように笑顔で抹茶を点てていた。点てた抹茶を東大生にすり足で進みながら運び、正座からのお辞儀の後、東大生が抹茶を飲む様子を満足げに見ていた。その後の懇親会で、茶道の歴史、着物、茶室等々に



関してハーバード生から多くの質問が飛び出したことからわかるように、今回の企画は茶室という非日常空間が作り出す一種の緊張感の中で茶道に込められた日本固有の美意識を学ぶ有意義な機会を提供することが出来た。また、ハーバード生だけでなく、東大生にとっても日本人としての精神に立ち返る機会となった。普段は意識しにくい日本文化の根底に流れる価値観への理解を、ハーバード生に紹介するという経験を通して深めることが出来た。

<レクチャー～東北復興を学ぶ・考える～>

日時：3/21 14:30~16:00

場所：東京大学駒場キャンパスコミュニケーションプラザ

■企画内容

その後の東北復興についての企画の布石として、株式会社ベネッセコーポレーション RouteH 尾澤章浩様、ハーバード大学生(現在休学中)で、東北復興について精力的に活動されている丹原健翔様に東北についてのレクチャーを受け、その知識をもとにディスカッションを行った。

■企画目標

21日、22日と続く東北復興をテーマとした企画の布石として、東北の知識のインプットを行う。震災復興に対する当事者意識を醸成する。

■企画詳細

丹原様より日本イスラエイド・サポート・プログラムの被災地での活動とその中で感じた東北の現実を実体験に即してお話し頂いた後、尾澤様より「今の東北においてどのようなリーダーシップが求められるか」について、実際に被災地でユニークなリーダーシップを発揮しながら活動している方を例にとった講義を受けた。ハーバード生にとっては震災復興をより身近なものとして捉えてもらい、東大生にとっては復興への当事者意識をもったうえでどのような振る舞いが求められているのか、を改めて真剣に考える契機となった。

<高校生交流企画>

日時: 3/21 17:00~20:00

場所: 東京大学駒場キャンパス KOMCEE

■企画内容

東大生・ハーバード生・高校生の計 50 名程度による、東北復興やグローバル人材についてのディスカッションの後、自由な交流の場を設けた。

■企画目標

- ・高校生と東大生・ハーバード生が繋がる「場」を作り出す。
- ・高校生が様々な「きづき」を得る場を作り出す。

■企画詳細と総括

アイスブレイク・スピーチ・ディスカッション・フリーインタラクションの 4 部構成。

① アイスブレイク「人間知恵の輪」

企画当初は皆緊張していたが、このセッションで緊張がとけ、続く学術的企画に向けた、各班の一体感や発言しやすい雰囲気を醸成できた。

② スピーチ「大学について高校生に伝えたいこと～日米トップ大学の内幕～」

このセッションは高校生の進路選択の一助になるようにと設けた。大学生は自分の経験を熱心に伝え、高校生も大学生の話に聞き入っていた。質疑応答の際にも高校生が物怖じせず積極的に学問に関する質問をしていた姿などがとても印象的であった。

② ディスカッション「震災復興におけるリーダーシップについて」・「グローバル人材育成のための教育の在り方、その解決のための起業案」
一つ目の「震災復興におけるリーダーシップ」は、今年度のカンファレンステーマが「持続可能なまちづくり」であること、そして東日本大震災から 3 年が経ち風化が進んでしまっていることを受けて、今一度震災について考えるために設定されたトピックであった。ハーバード生・東大生は、東日本大震災についての事前授業を株式会社ベネッセコーポレーション RouteH 尾澤章浩様、ハーバード大学生(現在休学中)で、東北復興について精力的に活動されている丹原健翔様に受けていたこともあり、そこで得た知識を活用してディスカッションに臨んだ。

震災復興についての知識不足からか、議論が行き詰まる場面こそ見受けられたものの、復興への当事者意識を改めて持ち直すことは出来た。二つ目の「グローバル人材育成のための教育の在り方、その解決のための起業案」では、「グローバル人材」という誰にとっても馴染みのある問題ゆえディスカッションは白熱した。一方で、発想を限定しすぎたためか「起業」にまで話が及んだ班は少なかったようだ。しかし、セッション全体を通じて、高校生もハーバード生の学術的姿勢を見て刺激を受けていたようだった。

④ 自由歓談

これは本企画を通して築いた参加者の交友関係を深めてもらうべく設定された場であった。皆積極的に他参加者に話かけ、会場全体が活気で満ち溢れていた。自由歓談は他の企画に比べ長い時間を設けたが、それでも終了時には、終了を惜しむ高校生が大半であった。最後の写真撮影の際には、企画開始前には想像しえないほど参加者同士が打ち解けており、本企画目標である「交流の『場』の設定」の成功が実感された。ハーバード生との交流が高校生にとって自分の将来を考える機会となれば本望である。



<鍋パーティー>

日時: 3/21 21:00~23:00

場所: 東京大学駒場キャンパス「和館」

■企画内容

HCAP 東京大学運営委員会の OB/OG を招待し、ハーバード生・HCAP8 期メンバー・OB/OG の三者で鍋を囲み歓談した。

■企画目標

ハーバード生と OB/OG の再会の場を提供すると共に、日本の夕食の定番である鍋を囲んで参加者同士が仲を深める

■企画詳細と総括

高校生交流企画の後、駒場キャンパス内「和館」にて OB/OG を招待し、合計 40 名弱が一堂に会し、鍋パーティーを楽しんだ。ハーバード生は初めて食べる鍋に最初は遠慮がちであったが、時間が経つにつれ箸も進むようになり、最後には「日本で食べた料理の中で一番おいしい」というハーバード生もいて、鍋を用意した東大生にとっては大変嬉しい一言であった。また、OB/OG の中にはハーバード生と約一年ぶりの再会を果たした者もあり、専攻している学問や将来の話で盛り上がる光景も見られた。



8 日目:レクチャー・キャンパスツアー・自由時間・東大生懇親会

<レクチャー ～持続可能なまちづくりを考える～>

日時: 3/22 10:00~12:30

場所: 東京大学本郷キャンパス工学部

■企画内容

東京大学大学院工学系研究科・社会基盤工学専攻の堀井秀之教授による参加型講義を、東京大学本郷キャンパス工学部 2 号館にて受講した。東北復興に関するケーススタディを用いた本講義を通して、東京カンファレンス学術企画全体を俯瞰し、総括を行った。

■企画目標

- ・東京カンファレンス最後の学術企画としてテーマ「持続可能なまちづくり」を俯瞰し、総括を行う。
- ・東北復興のケーススタディを通して、日本の実状と「持続可能なまちづくり」への取り組みを学ぶ。
- ・東京カンファレンスを通して学んだことを活かして出したアイデアを堀井先生によるご指導でブラッシュアップする。
- ・ハーバード大学生に東京大学の質の高い授業を受ける機会を提供する。

■企画詳細と総括

本企画は、堀井教授の全面的なご協力により実現した。堀井教授に、私たち HCAP の東大生、ハーバード生にぜひ東北について考えてほしいという思いを込めた、宮城県山元町のいちごファームのケーススタディを用いて参加型講義とグループディスカッションを組み合わせたレクチャーをしていただいた。

レクチャーでは、「住民と行政という従来の二者モデルではなく、第三の支援者を入れた三者モデルだからこそ解決できる問題がある」「今の



大学にはパラダイムシフトが必要だと思う。もはや学生は研究だけでは目を輝かせない。社会に出て社会をよくする、価値創造をすることを求めているのではないか」といった印象に残るお話をいただいた。

また、東大生とハーバード生によるグループディスカッションも非常に有意義なものとなった。東北に関してはカンファレンス中に訪れる機会を得なかったのが懸念だったが、ハーバード生も真剣にアイデアを出し、私たち東大生が持ちにくい視点を提供してくれた。東大生にとっても、日本人として改めて東北を見つめなおす良い機会となった。あるグループでは、東北の町を「持続可能なまち」にするためには若者の定着をはかることが必要不可欠だと思われるが、どうすれば若者を惹きつけることができるだろうか、というところから議論が始まった。このグループでは新しい産業の発展、教育の推進等アイデアを出し、また、その過程でいちごファームのように地域の特色を活かすことや地元の声を



取り入れることの大切さも考えた。世界中の多くの若者が都市部に憧れ、集まるといふトレンドは「持続可能なまちづくり」にとっては好ましい場合が多い。しかし一方で、この傾向はその土地のコミュニティを破壊することもある。では、「持続可能なまちづくり」のためにないがしろにされてよい場所はあるのだろうか。昔ながらの暮らし、コミュニティ、風景の価値を改めて評価するべきではないのか。真の意味での「持続可能なまちづくり」とは何なのか、本当に大切なものは何なのか、思いを馳せ、東京カンファレンス最後の学術企画は幕を閉じた。

＜本郷キャンパスツアー＞

日時：3/22 12:30~13:00

場所：東京大学本郷キャンパス一帯

■ 企画内容

ハーバード生に本郷キャンパスを案内し、日本の歴史の紹介と絡めて東京大学の紹介をする。

■ 企画目標

カンファレンスホスト校である東京大学についての理解をハーバード生に深めてもらう。

■ 企画詳細と総括

安田講堂、三四郎池、総合図書館、赤門の順番で本郷キャンパス内をまわった。安田講堂はあいにく改修中だったが東京大学のシンボルである旨が伝わったようだった。三四郎池では、都心にこのように緑にあふれた場所があるなんて、とハーバード生が不思議がっていたため、東京大学の敷地はもともと御家屋敷だったことを説明した。総合図書館は雑誌閲覧室などの内装に目をひかれたようであった。赤門の前では赤門の由来について説明した後、集合写真を撮った。東大生側がまだ駒場キャンパスで授業を受けているため、本郷キャンパスになじみがなく、個人的な思いや詳しいことについて説明することは叶わなかったが、まんべんなく本郷メインキャンパスを紹介することは出来た。



<フリータイム>

日時: 3/22 14:00~18:00

場所: 東京周辺

■企画内容

最終日の午後に東大生とハーバード生のグループで東京の好きなところを回る。

■企画目標

東京カンファレンスを通して東京、そして日本の良さを東大生の視点で紹介してきたが、最終日はハーバード生が見たい日本、ハーバード生が思う日本を自分たちで見つけてもらい、「日本」を自身の中で完結させる。

■企画詳細と総括

各グループに分かれて都内の様々な場所を訪れた。「日本のスーパーマーケットに行きたい」というハーバード生の要望に応えたグループもあれば、原宿、渋谷、浅草などを訪れたグループもあったようだった。

原宿を訪れたグループは、竹下通りを歩いた後、着物の古着屋でハーバード生が着物を購入するのを手伝った。竹下通りではあまりの人の多さにハーバード生も驚いていたようだったが、クレープを食べながら日本のポップカルチャーについて意見を交換するなどした。また、着物



の古着屋では実際に売り物の着物を指しながら「着物にはどの帯が必要なのか?」「この紐はどのように使うのがよいのか?」と聞くなど、着物に対してとても興味を持ったようだった。そして、最後には記念として男物の着物を購入した。ハーバード生は買った着物に対して、「ちょっとしたときに着てみる」といった感想を述べており、そのような感覚で着物を着ることができるのかと驚かされた。

自由時間は長くはとれなかったものの、各グループとも最終日にハーバード生と自由に東京を歩き、語り残したことを語り尽くしたのではないだろうか。



<Socializing Party with Harvard and UT>

日時: 3/22 19:00~21:00

場所: イタリアントマト Jr.カフェ駒場キャンパス店

■企画内容

イタリアントマト Jr.カフェ駒場キャンパス店をお借りして、HCAP 外の東大生とハーバード生とが交流できる懇親会を用意した。また、この懇親会の直前に、御礼の会と称して、山本教授、堀井教授、松田准教授に、HCAP 参加者一同から感謝の言葉と花束をお渡しする時間を設けた。企画運営には、駒場友の会にご協力頂いた。

■企画目標

弊団体の活動を、HCAP 参加者内部にとどめてしまうのではなく、HCAP 外の東大生にもこの機会を還元することが必要であると考え、その具体的手段として懇親会を企画した。また、御礼の会においては、日頃からお世話頂いた山本教授、堀井教授、松田准教授に、感謝の思いをお伝えすることが目的であった。

■企画詳細と総括

御礼の会では、弊団体 8 期代表の御代田と、ハーバード生から 2 人が、直接感謝の気持ちをお伝えした。わずか 15 分の会ではあったが、時間を用意してお世話になっている方々に感謝の気持ちをお伝えすることは重要であると改めて実感する会となった。

懇親会は盛況を頂いた。

HCAP 外からの参加東大生として 36 名にお越しいただき、2 時間ほどハーバード生と立食形式で交流できる会とした。終始、ハーバード生と東大生は話が絶えず、懇親会の参加東大生からは「時間がもっと欲しかった」「ハーバード生の取り合いのようになった」「日米それぞれの教育の問題点について議論できた」といった嬉しい声を頂いた。またハーバード生たちからも「多くの東大生のことを知れた」「自分の出身である中東に興味を持った東大生に出会うことができ、たくさん話せた」などの感想が聞かれた。当初の目的であった、HCAP の場を、東京大学に還元するという目的が大いに達成される会となった。また、ハーバード生と参加東大生を結びつけることのみならず、参加した東大生同士の知り合う場を今回の懇親会は提供できたように思う。



9 日目(最終日):ハーバード生帰国

最終日は正午発の便に乗るため、東大生とハーバード生は和館を出発し成田空港へと向かった。成田空港へと向かう電車の中では、9 日間のプログラムを振り返りながら参加者同士が思い思いの話し、東京カンファレンスの最後の時間を楽しんだ。そして成田空港にて参加者同士が抱擁し、別れを告げ、9 日間の東京カンファレンスは幕を閉じた。

成田空港での別れの際に一部の参加者が流した涙が HCAP の交流の密度の濃さを象徴しているように思えた。



❁ 参加ハーバード生の声

カンファレンス終了後、参加したハーバード生より感想をいただいた。その一部を以下に紹介する。

Coming to Japan was a big change in perspective. I have never been in a society where each person is so socially responsible, where a huge city is so clean and safe. I am so impressed. On the other hand, it was difficult to be in a less individualistic society, where people do not voice their thoughts. I felt sometime unsure whether to speak openly. So this entire trip has been life-changing.

(日本での体験は、私の視野を広げるものであった。大都市にもかかわらず清潔な環境で安全な生活を送れることから、日常生活において国民1人1人が社会的責任を果たしていることが見て取れ、非常に印象的だった。その反面、個人主義的なアメリカ社会とは異なり、本音を語らない人が多く、自分の考えていることを正直に言っていないのか戸惑うこともあった。東京カンファレンスは、文化の違いを肌で感じられたという意味でも自分の見識を深める貴重な経験であった。)

My favorite part was every moment talking with the delegates--eating, walking, or in between events. We asked a lot of questions about life in Japan. My favorite programs were definitely the Tokyo and Mitsubishi tours. I saw the incredible urbanization and technology, as well as the challenges of preserving history. I saw the generational divide in thought and culture. The Peace Museum was also fascinating because it enabled Japan and the US to discuss Okinawa in a case where I think both parties need to consider human rights. Finally, the lecture and brainstorming with Professor Horii was awesome! I enjoyed the case study a lot. Harvard should definitely try something similar.

(東大生との他愛のない交流の時間がとても有意義であった。企画間の移動時間や、食事中のちょっとした時間に、日本の生活についての話がたくさんできた。最も印象的だった企画は東京ツアーと三菱地所訪問だ。伝統を守りつつ急速な都市化と技術革新を進めるという、新旧を融合させる取り組みについて学べた。また、世代によつての考えや文化の違いについても学べた。沖縄のひめゆり平和祈念資料館も非常に興味深かった。沖縄では、日本本島とアメリカの学生として、それぞれが当事者意識をもって人権について議論することができた。最後に受けた、堀井教授による講義及びワークショップも素晴しかった。ケーススタディーが特に興味深く、ハーバード大学でも是非あのようなワークショップをしてみたいものだ。)

Speaking with the Okinawan students about military bases made me realize how complex social issues are---we had three different sides of the issue present at the talk (US, Okinawa, Japan), and while everyone had some sort of valid point or justification for their beliefs, it highlighted how difficult it is to find a solution that satisfies everyone.

(沖縄の大学生と基地問題について議論することで、社会問題がいかに複雑なものであるかに気付かされた。議論には、アメリカ・日本本島・沖縄という三つの異なる立場が存在していて、どの意見にも一定の正当性や妥当性があり、全員を満足させるような解決策を生み出すことの困難さを痛感させられた。)

A lot of the programs, and the conference as a whole, helped me reconsider a lot of my viewpoints and ideologies. Part of it was just being exposed to a different culture - one that I almost immediately began to respect - but the various lectures and discussion sessions, especially in Okinawa, made me think a lot about alienation, spatial segregation in countries that have multiple geographically separated regions and also how political ideologies across the world are manifested in different forms.

(東京カンファレンス全体や、その中の一つ一つの企画は、私の価値観やイデオロギーについて考え直す良いきっかけになった。そのきっかけの一つに、馴染みのない文化を体験できたことがある。カンファレンスを通して、私はいつの間にか日本の文化に敬意を払うようになっていた。それ以外には沖縄での様々な講義やディスカッションの企画を通して、社会的な疎外感、地理的に分裂された地域が存在する国における空間的分離、そして政治的イデオロギーが世界では様々な形で解釈され、社会に適用されている事実などについて考えさせられた。)

✿ 東京カンファレンス 2014 総括

今年度の東京カンファレンスは、8期の理念である“Lead our human network, Look for blind spots, Create change”を達成するために2つの目標を掲げました。一つは、次世代を担う人材としてハーバード生と将来の協働の布石となる絆を築くこと、そしてもう一つが、日本や日本ならではの「持続可能なまちづくり」について包括的に見識と思考を深めることです。目指したのは、Academic—Cultural—Social という3つの観点から、9日間にわたり多様な経験をする中で日本について立体的に学ぶことです。日本の代表都市東京、日米の交差点沖縄、震災から3年が経った東北、という3地点を取り上げ、日本の持続可能なまちづくりに対する取り組みに迫り、またそれによって日本そのものの姿にハーバード生・東大生共に向き合うことが目標でした。

日本の代表都市として常に進化を遂げてきた東京では、その「持続可能なまちづくり」への取り組みについてフィールドワークを通じて学び、ハードウェア・ソフトウェアの二つの学術的側面から理解を深めることができました。

そしてカンファレンスの中3日では沖縄を訪れました。沖縄への訪問は私たちにとっては必然的であり、そこには、沖縄戦や基地問題の形で、日米が深く関わる沖縄には、ハーバード生と東大生と一緒に学び考えるべきものがあるのではないか、また、当事者意識を持った積極的な学びの場を作り出せるのではないか、といった思いが詰まっていました。沖縄におけるカンファレンスの実施と、テーマ「持続可能なまちづくり」、この二つが交差するところは、「持続可能性の前提には『平和』がある」という点でした。こうして生まれたカンファレンスのストーリーは、在沖米軍基地とその周辺の町、基地跡地利用の学習を通して、沖縄や日米の現状に向き合うとともに、その根底にある歴史や平和についてハーバード生と東大生が自然と考えを深める、といったものでした。実際に沖縄でのカンファレンスを行った結果、この目的は期待以上に効果的に達せられました。

もうひとつハーバード生・東大生共に向き合ったのが東北です。周囲の方に背中を押していただきながら、復興への取り組みを学び、理解したことで、復興への思いを新たに、現在、最も「まちづくり」が重要となっている東北に向き合う姿勢を見直すきっかけになりました。

そして、東京—沖縄—東北の全体を俯瞰したところで、東京カンファレンスは幕を閉じました。

さて、ここで、上述した理念“Lead our human network, Look for blind spots, Create change”に沿って東京カンファレンスを振り返りたいと思います。

まず“Lead our human network”に関して、東大生とハーバード生が築いた強固な関係に加え、沖縄の学生同士のコミュニティが生まれたのも、“human network”の広がりとして私たち8期の理念に適う結果でした。そして今後とも、この9日間で築いた関係を深め広げていくことが出来れば、それは願ってもないことです。

次に“Look for blind spots”に関して、私たち東大生にとってこの東京カンファレンスは、見えていなかったものが見えるようになった、非常に貴重な経験でした。「日本が」沖縄に抱えている問題と、真剣に向き合い、深く考え、沖縄の友人を得たことで、沖縄への当事者意識は自然に生まれました。沖縄のことに限らず、日々の雑踏の中で見落としがちなことは沢山あります。今後の日本を牽引すべき立場となる私たちは、この学びを将来にわたって重要な記憶として残してゆきます。

最後に“Create change”に関して、この1年は学生である自分たちが変化をもたらす価値を創出することの難しさを痛感する1年でもありました。ですが、沖縄にて現地の学生、ハーバード生、東大生の三者が集まって基地問題を議論する場を提供できたということは、ひとつの価値創出であったように思います。“This experience actually changed my life”—あるハーバード生の一言です。この9日間のカンファレンスが社会全体に与えた価値は大きくないかもしれませんが、この言葉が象徴するように、東大生やハーバード生を含め東京カンファレンスの一つ一つの企画に参加した人が、何らかの形で「変化」してくれたのなら、それは私たちにとって願ってもないことです。

最後になりましたが、こうして無事に9日間の東京カンファレンスを終えることができたのは、多くの方のご支援・ご協力があったことです。HCAP8期一同、心より感謝申し上げます。そして、今後ともHCAP 東京大学運営委員会をよろしく願いいたします。

HCAP 東京大学運営委員会 8期一同

※ 東京カンファレンス 2014 会計報告

<収入>

項 目		金 額
寄付金	株式会社 ベネッセコーポレーション	1,500,000
寄付金	駒場友の会	300,000
寄付金	HCAP TOKYO alumni	100,000
計		1,900,000

<支出>

項 目	金 額
食費	282,725
交通費	1,017,810
物品費	174,724
施設費	64,900
宿泊費	218,500
雑費	10,240
計	1,768,899

<収支差額>

項 目	金 額
計	131,101

※会計支出内訳詳細は、別途関係者の皆様にお送りしました。

以上